

## 第170話 教育の機関「私塾と寺子屋②」 中山町歴史散策

寺子屋は、7歳前後で師匠のもとに就きます。医師・神官・山伏・僧侶・村役人などが仕事をしながら教える門に、親に連れられて入門したといえます。習った科目は、もっぱら「読み・書き・算盤」で、中には1教科のみ、あるいは複数教科を1人の師匠に習うこともありました。

算数は日常的な加減乗除、習字は「いろは」の仮名文字（変体仮名、万葉仮名を含む）から始まって『名頭』『国尽』など、算数も高度になると方角、十二支、高等なものでは『商売往来』などの商い知識、『消息往来』のような文章要諦が教材となりました(図)。

その一方で、人づくりの講義も好んで行われ、『実語教』『童子教』『今川状』のような教訓的なもの、『庭訓往来』のような手紙例文も用いられています。

ただ、藩校で用いられた四書五経のような經典など難しいものは用いられなかったようです。

その中で、明和年間（1764～1772年）や天明年間（1781～1788年）に刊行された『節用集』や、和算の計算手引に用いられた『塵劫記』の改訂されたものが使用され、それが当町の旧家にも残されています。



図『消息往来』書簡の書き出し文例集

### 【用語説明】

国尽：日本諸国の国の名をすべて列挙して、歌いやすいようにつづつたもの。

要諦：物事の肝心なところ。

※引用 中山町史 中巻

第10章第2節 教育

## 私たち地域おこし協力隊です！ No.37



皆さん、こんにちは。地域おこし協力隊の伊藤です。

今回は、観光の担当者として、観光の語源について考えてみたいと思います。

観光という言葉が生まれたのは、古代中国の四書五経の一つ『易経』にある「観国之光、利用賓于王（国の光を観る、用て王に賓たるに利し）」の一文からだと言われています。

それは「国の文化、政治、風俗をよく観察すること」、「国の風光・文物を外部の人々に示すこと」というような意味を有していたと言われています。

つまり、観光の「光」とは、「その土地の素晴らしいところ（特色・魅力）」を指し、観光とは「その土地ならではの魅力を見つけに行くこと」という意味になります。

以上のことを踏まえて、以前から国としても、「観光」を単なる余暇活動の一環としてのみ捉えるのではなく、より広く捉えるべきであるとしています。

私も県外に14年住み、国内、海外を旅行して、様々な地域の光（地域の特色・魅力）を観てきました。その視点で、中山町の光（地域の特色・魅力）を町外、県外、海外の方々に観ていただけるように、今後も様々な活動を展開していきたいと思っています。

●協力隊への問い合わせ先● 伊藤 ☎662-2114（産業振興課）／ 稲垣 ☎662-2235（教育課）